

巖嘔の「バス観光ハプニング in 新潟 2012」研究ノート

濱田 真由美

はじめに：「バス観光ハプニング in 新潟 2012」の開催経緯

新潟市美術館では、2012年7月28日から10月8日まで企画展「巖嘔 ふたたび虹のかなたに」を開催した。この展覧会は同年2月に東京都現代美術館で始まり、新潟での開催後、広島市現代美術館へ巡回したもので、巖嘔の初期から最新作までを紹介する大回顧展であった。展覧会では絵画や版画といった平面作品を中心に、彫刻やインスタレーションといった立体作品、さらに彼が中心的役割を果たしてきた前衛芸術家集団「フルクサス」での活動を紹介した写真や映像資料もあわせて展示された。巖嘔の芸術世界を語る上で、フルクサスの活動は決して欠くことのできない重要な部分を占めている。しかし、フルクサスの作品の多くはパフォーマンスという形を取っているため、今日の私たちはそれらを残された写真や記事といった記録によってしか知ることができない。このため、巖嘔の回顧展として企画された本展覧会では、作家本人による実際のパフォーマンスを紹介することが必要不可欠であると考えた。

第一会場であった東京都現代美術館では、サンデー・プロジェクト《シジフォスの神話》と題された巖嘔によるワーク・イン・プログレス形式のパフォーマンスを、会期中の毎週日曜日に行っていた。また、巖嘔の《O⁷》と武満徹が巖嘔に捧げた《七つの丘の出来事》¹を一柳慧の演出で再現したパフォーマンス・ナイトを行った²。かくして、第二会場の新潟でもフルクサス・イベントの開催を模索していたが、オリジナル・メンバーを国内外から招聘してイベントを開催することは予算的に不可能であったため、当初は巖嘔による講演会「自由について」(図1)の開催のみが予定された。「講演会」と銘打たれたこのイベントは、巖嘔が過去に福井でも行ったことのあるイベントだったようだが、その内容を当日まで知らなかった担当者をはじめとするスタッフや観客のほとんどは、彼の白熱したパフォーマンスを突如、目の当たりにして圧倒されたのだった³。このイベントを経て、巖嘔のフルクサス・イベントを一人でも多くの人に実際に体験してもらいたいという担当者としての気持ちが一層と強まり、「バス観光ハプニング in 新潟 2012」の開催へとつながった。

1. 巖嘔とフルクサス・イベント

1958年に渡米した巖嘔は、アクション・ペインティング風の絵画作品から「エンヴァイラメント」とよばれる大型の立体やインスタレーションまで、約3年の間に次々と新しい作品を生み出していた。ちょうどこの頃、ニューヨークではアラン・カプローの考案した「ハプニング」が話題を呼んで、ジム・ダインやクレス・オルデンバーグなど様々なアーティストがパフォーマンスを新たな表現形態として発表していた。それらは演劇的なものから音楽的要素の強いものまで多様な広がりを見せていたが、巖嘔は特に、この頃偶然に知ったジョン・ケージの作品《四分三十三秒》(1952年)に大きな衝撃を受けたという⁴。こうして、周囲のアーティスト仲間とともに、次第にパフォーマンスにも取り組み始めた巖嘔に決定的な出会いが訪れる。1962年に彼の初個展を自身の経営する画廊で開催することを約束しながら夜逃げし、1964年にニューヨークに戻ってきたジョージ・マチューナスとの再会である⁵。巖嘔はマチューナスがヨーロッパで展開し、成功を収めていたフルクサスの活動に加わり、マルチプル作品の制作・販売や「イベント」と呼ばれるパフォーマンスに積極的に参加して、グループの中心的メンバーの一人となっていく。1964年4月11日のフルクサス・ショップ開店日から12回にわたって「第1回フルクサス・コンサート」が開催されたが、そこで披露された《レインボー・ミュージック No.1》(6月27日、カーネギー・リサイタル・ホール)が巖嘔の最初のフルクサス・イベントだった。その後も「レインボー・ハプニング・シリーズ」と名付けられたパフォーマンスをニューヨーク各所で矢継ぎ早に行っている⁶。

こうしてフルクサスの活動を精力的に行っていた巖嘔は、1966年4月に出発した世界

1 同作品は1966年11月14日に草月会館ホールで行われた「空間から環境へ」展(1966年11月11日-16日、銀座松屋8階で開催)の関連イベントにて初演された。当時の資料によると、タイトルは《7つの岡のイベント》であったが、のちの巖嘔のインタビューでは、《七つの丘の物語》であったとされている。(『輝け60年代 草月アートセンターの全記録』フィルムアート社、2002年、188頁)

2 2012年3月25日に東京都現代美術館企画展示室内アトリウムにて開催。なお、同館では同時期に常設展示室でMOTコレクション「特集展示：福島秀子／クロニクル 1964-OFF MUSEUM」を開催しており、その関連プログラムとして、2012年4月29日にフルクサスのメンバーであった塩見允枝子のトーク&パフォーマンスも行われた。



図1 巖嘔による講演会「自由について」
2012年7月28日、新潟市美術館

3 2012年7月28日に新潟市美術館講堂にて開催。満席の聴衆を前に、講師紹介が終わると、巖嘔は用意された黒板に白チョークでおもむろに「自由」の文字を書き始めた。様々な大きさでランダムに自由と書き続け、黒板からはみ出し、壁や床にも書きながら講堂から出て行ってしまふ。残された聴衆は彼の後を追いつつ階段を下り、床に這いつくばって無言で書き続ける姿を見つめる。ついに美術館を飛び出し、そこでパフォーマンスは終了した。

4 巖嘔「虹のかなたに」no.11、『美術手帖』1987年8月号。

5 巖嘔「虹のかなたに」no.12、『美術手帖』1987年9月号、no.15『美術手帖』1987年12月号。

6 レインボー・ハプニング・シリーズ No.2「ミックス・ミックス」1964年10月16日、ワシントン・スクエア・ギャラリー／No.3「ストックハウゼンの《オリジナル》のプレゼンテーション」1964年9月14日、ジャクソン・ホール／No.4「レインボー・ディナー」1965年1月25日、カフェ・オ・ゴッー／No.5「ディックヒギンズによる《ザ・タルト》のパフォーマンス」1965年4月11日、サニー・サイド・ガーデン／No.6「レインボー・ミュージック No.2」1965年9月25日、カーネギー・リサイタル・ホール(『巖嘔 ふたたび虹のかなたに』2012年を参照)



図2 贅囀(レインボー・イベント)
1966年11月14日、草月会館ホール(西山輝夫氏撮影)



図3 武満徹(7つの岡のイベント)
1966年11月14日、草月会館ホール(西山輝夫氏撮影)

7「空間から環境へ」展の詳細については以下を参照。
Midori Yoshimoto, "From Space to Environment: The Origins of Kankyō and the Emergence of Intermedia Art in Japan", Art Journal, vol.63, no.3 (Fall 2008), pp.24-45.

8 1965年9月6日～14日に「フルクサス週間」が銀座の画廊クリスタルで開催された。(『フルクサス展—芸術から日常へ』展覧会図録、うらわ美術館、2004年、89-93頁)

一周旅行の終着地として8年ぶりに帰国した東京でも、2つの重要なイベントを行っている。ひとつは、銀座の松屋デパートで1966年11月11日から16日まで開かれていた「空間から環境へ」展の関連イベントとして行われた、「空間から環境へ—ハプニング」(1966年11月14日、草月会館ホール)でのパフォーマンスである。このイベントでは、秋山邦晴、一柳慧、武満徹、山口勝弘らの作品とともに、贅囀の《レインボー・イベント》(図2)が上演された。この時、贅囀は自分以外の作品にも出演しているが、中でも武満の《7つの岡のイベント》(図3)は贅囀に捧げられた作品だった⁷。もうひとつは、この約1カ月後に、今度は贅囀の主宰で行われたグループ・パフォーマンス「バス観光ハプニング」である。

この頃、フルクサスの動向については、前年に帰国した塩見千枝子らによって日本でも早々に紹介され、既知のものとなっていた⁸。一方、「エンヴァイラメント(環境)」という概念は、同年にアメリカで出版されたカプローの著書『アッサンブリッジ、エンヴァイラメント、ハプニングス』で注目されるようになったばかりだったが、同書では「エンヴァイラメント」の代表的作品として贅囀のアルミによる立体シリーズが取り上げられていた。こうしたことから、贅囀の作品は日本でも再び注目を浴びようになり、「空間から環境へ」展への出品を要請されたのだった。

贅囀は、その後も世界各地でのフルクサス・イベントに参加しながらレインボー・ハプニング・シリーズをNo.20まで継続したほか、日本国内でもほぼ10年ごとにイベントを開催してきた(別表1)。その中で、1966年に初めて行われた「バス観光ハプニング」は、贅囀以外による再演も含め、過去に国内で3度実施されている。今回の「バス観光ハプニング in 新潟 2012」について記述する前に、まずは過去の同イベントについて確認しておきたい。

別表1 贅囀のフルクサス・イベント(日本国内)

1966年	11月14日	レインボー・ハプニング・シリーズ No.7《七つの丘の出来事—贅囀のために》草月会館ホール
	12月18日	「バス観光ハプニング」品川埠頭、泉岳寺、明治神宮、護国寺
1976年	8月23-28日	レインボー・ハプニング・シリーズ No.14《0?》志賀高原ホテル、長野
1986年	7月25日	レインボー・ハプニング・シリーズ No.16《25メートル虹のイベント》丸頭竜川、福井
	8月23日	レインボー・ハプニング・シリーズ No.16《25メートル虹のイベント》永平寺、福井
1987年	5月14-16日	レインボー・ハプニング・シリーズ No.7「草月フェスティバル'87/再現'66」草月アートセンター
1997年	10月26日	「久保真次郎メモリアル Ay-O's Performance (Genesis by Emmett Williams's Genesis)」跡見学園、東京
2004年	5月29日	「バス観光ハプニング vol.2 ベン・パターソン70歳記念来日富士山登山ツアー」東京、富士山周辺
2006年	3月11日、12日	「福井フルクサス」福井県立美術館、大野市・誓念寺
	3月3日	AY-O's Game Event《Object Mandala Floor Pieces with Words》ギャラリー360°、東京
2012年	2月5日～4月29日の毎週日曜日	サンデー・プロジェクト《シジフォスの神話》東京都現代美術館
	3月25日	パフォーマンスサイト《0?》《七つの丘の出来事》東京都現代美術館
	7月28日	講演会「自由について」新潟市美術館
	9月22日	「バス観光ハプニング in 新潟 2012」新潟市美術館、正福寺、笹川流れ、乙宝寺
	12月15日	「虹の晩餐会」ピストロ45(キャラントサンク)、広島市

(「贅囀 ふたたび虹のかたに」2012年を参照)

2. 贅囀の「バス観光ハプニング」について

先に述べたように、「バス観光ハプニング」は1966年に贅囀によって初演されて以来、今回の新潟での開催も含め、4回の上演が実現している。各回の詳細は下記のとおりである。

(1) 「バス観光ハプニング」

日時：1966年12月18日(日) 12:00～17:30

場所：東京都内(品川埠頭、泉岳寺、明治神宮、護国寺)

主宰：贅囀/副主宰：山口勝弘、秋山邦晴/オーガナイズ：南画廊、志水楠男

出演：贅囀、山口勝弘、秋山邦晴、塩見千枝子(允枝子)、東野芳明、林のり子 他

プログラム：

No.	作者名	作品名	場 所
1	贅囀	凧のイベント	品川埠頭
2	塩見千枝子	水たまりのイベント	
3	ディック・ヒギンズ	危険音楽	
4	ヴォルフ・フォステル	テレビ・デコラージュ	泉岳寺
5	アル・ハンセン	トイレット・ペーパー・イベント	
6	アラン・カプロー	ハプニング	明治神宮
7	山口勝弘	焚火のイベント	
8	ダニエル・スポエリ	イーティング	護国寺
9	ロバート・フィリウー	愚かな考えのための十分な食べ物	
10	アリソン・ノウルズ	イベント	護国寺
11	ベン・パターソン	イベント	
12	ディック・ヒギンズ	握手のピース	護国寺
13	ディック・ヒギンズ	十円玉のピース	
14	トマス・シュミット	分割のピース	
15	その他…	……	

本作品は1966年に贅嘔が南画廊で個展を開催した際に、画廊主の志水楠男氏にオーガナイズを依頼し、贅嘔のフルクサス・イベントとして日本で初演された。出演者の多く（秋山邦晴、塩見千枝子、東野芳明、山口勝弘ら）が、その直前に贅嘔が参加したイベント「空間から環境へ」の中心メンバーであったことから、このイベントに触発されて直後に企画されたのだろうと推察される。贅嘔は、「バスを借り切って人を乗っけて、〈フルクサス〉の連中のピース（作品）をやりたい」⁹と述べていたが、それは、「空間から環境へ」展のイベントでフルクサスが十分に紹介されなかったと感じたからではないだろうか。初回の内容は参加者たちに配られたプログラム（図4）と記録映像（図5、6）などからうかがい知ることができるが¹⁰、贅嘔が志水氏に要望した通り、まさにフルクサスの作品を中心に紹介する内容となっていた。しかし、中にはアラン・カプローや山口勝弘といったフルクサス以外の作家の作品も含まれており、ハプニングの最前線を紹介するというような意味合いもあったようだ。

その時のプログラムに名前が掲載されている「篠原有司男、滝口（ママ）修造、吉村益信」は実際には不参加だったと、参加者の一人であった西山輝夫氏は証言している。また、当時の記録写真にある「品川火力発電所」の文字から、最初の目的地は現在の品川埠頭付近であったことを確認したという（図7）。

(2) フルクサス再演 Vol.4「バス観光ハプニング2003」

日時：2003年5月18日（日）11:00～18:00

場所：東京都内

主宰：ギャラリー 360°／構成：村井啓哲、菅谷幸

協力：西山輝夫、益成宏樹、長澤章生、ヴァリンド、村井啓哲

出演：ヴァリンド、矢野礼子、獅子倉シンジ、五十嵐広威、村井啓哲

プログラム：

No.	作者名	作品名	場所
1	ケン・フリードマン	フルクサスを説明する	ギャラリー 360°
2	エメット・ウィリアムス	数え歌	
3	ナム＝ジュン・パイク	牽引組曲	表参道
4	ケン・フリードマン	クリストのための楢包	代々木公園
5	ケン・フリードマン	クリストへのオマージュ	
6	トマス・シュミット	サニタス No.165	車内
7	ジョージ・ブレクト	弦楽四重奏	赤坂氷川神社
8	アリソン・ノウルズ	あなたが選んだ靴	車内
9	ケン・フリードマン	観客のためのカードミュージック	お台場
10	エメット・ウィリアムス	ラ・モンテ・ヤングのために	
11	オノ・ヨーコ	ランドリー・ピース	車内
12	ベングト・アブ・クリントベルク	2つの旗のイベント／2. デモンストレーション	絵画館前銀杏並木
13	ラリー・ミラー	観客のための小片	
14	リチャード・マックスフィールド	メカニカル・フルックス・コンサート	車内
15	トマス・シュミット	サニタス No.35	新宿駅周辺
16	アリソン・ノウルズ	景品の構築	その他随時
17	アリソン・ノウルズ	豆のイベント	
18	ミラン・クニジャーク	日曜日のイベント	
19	ミラン・クニジャーク	スマイル・ゲーム	

初回から37年後の2003年、フルクサスを専門的に紹介してきたギャラリー 360°が主宰となり、1966年のイベントをもとに「バス観光ハプニング」を再演した（図8）。タイトルに付された「フルクサス再演 Vol.4」は、ギャラリー 360°が2000年より不定期に開催してきた「フルクサス・エクストラ」という資料展示とイベントのシリーズの4回目であることを示している¹¹。この時期は贅嘔がニューヨークと日本を行き来して不在

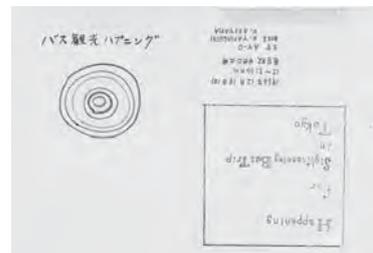


図4 「バス観光ハプニング」プログラム

9 前掲書、『輝け60年代 草月アートセンターの全記録』、187頁。



図5 塩見千枝子〈水たまりのイベント〉
（「バス観光ハプニング」1966年より）
（西山輝夫氏撮影）



図6 ヴォルフ・フォステル〈テレビ・デコラージュ〉
（「バス観光ハプニング」1966年より）
（西山輝夫氏撮影）

10 この時の取材記事が『美術手帖』（1967年2月号76頁）に掲載された。また、贅嘔自身も後にこのイベントについて、前掲の『輝け60年代 草月アートセンターの全記録』で振り返っているが、年代や場所についての彼の記述にはいくつかの間違ひがみられる。



図7 「アル・ハンセン〈トイレット・ペーパー・イベント〉」
（「バス観光ハプニング」1966年より）
（西山輝夫氏撮影）

11 フルクサスのイベントは、「スコア」を用いれば誰でも再演が可能である点が最大の特徴である。このため、日本国内でも贅嘔らオリジナル・メンバー以外によってもフルクサス・イベントの再演が次第に行われるようになった。その代表的な取り組みが、ギャラリー 360°による「フルクサス・エクストラ・シリーズ」である。同シリーズは、2000年、2001年、2002年、2003年、2005年、2011年、2012年の計7回実施された。

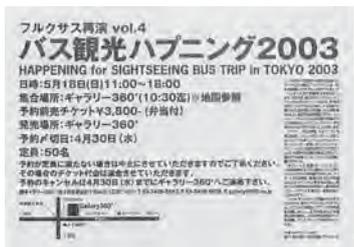


図8 「バス観光ハプニング 2003」フライヤー

なことが多かったため、「バス観光ハプニング2003」は本人には知らされずに、ギャラリー360°の関係者のみで企画・実施された。したがって、作品の再現には、1回目の「バス観光ハプニング」に実際に参加した西山輝夫氏の記録が大きな役割を果たしている。第1回のイベントをできるだけ忠実に再現しようと試みるも、時代の変化により無くなってしまった場所や、今日においては再現が不向きなものなどもあったため、新しく選出した場所とプログラムにより行われた。

その結果、1回目と比べて、取り上げられたアーティストが大きく変わっていることがわかる。第1回に登場した作家のうち、アリソン・ノウルズとトマス・シュミット以外は第2回には含まれておらず、逆に第2回に登場する12人のうち、8人は第1回には含まれていない作家の作品となった。もちろん、この時は主宰が贅嘔本人ではないため単純な比較はできないが、この再演がギャラリー360°による「フルクサス・エクストラ・シリーズ」の一環として行われたことも忘れてはならない。同シリーズの目的は、「フルクサスの作品を実際に体験・解釈すること」であるから、できる限り多くの作家の未体験作品を含めることを意図したと考えられる。結果として、その後の贅嘔による「バス観光ハプニング」にも登場しない作品が、この第2回には多く含まれることとなった。

このイベントと時を同じくして、ギャラリー360°はケン・フリードマン編集の『The Fluxus Performance Pocketbook』（和訳、改訂版）を300部発行。また、アリソン・ノウルズの作品《豆のイベント》は、このイベントのために新しく書かれた作品であった。

(3) 「バス観光ハプニング Vol.2 ベン・パターソン70歳記念来日富士登山ツアー」

日時：2004年5月29日（土）10:00～21:00

場所：東京都内、富士山周辺、車内

主宰：贅嘔／協力：村井啓哲／オーガナイズ：ギャラリー360°

プログラム：

No.	作者名	作品名	場 所
1	ロバート・ワッツ	2インチ	表参道
2	ジョージ・ブレクト	出口	車内
3	フィリップ・コーナー	お寺の鐘	千寿院
4	ヨーゼフ・ボイス	チーフ	車内
5	ディック・ヒギンズ	コンステレーション No.4	
6	ロバート・フィリウー	愚かな考えのための十分な食べ物	談合坂サービスエリア
7	斉藤陽子	交換	
8	ミラン・クニジャーク	ファッション	車内
9	アリソン・ノウルズ	シャッフル	精進湖
10	ダニエル・スポエリ	Meal Variation for Today	
11	ウィレム・デ・リダー	Laughing no Sound	
12	ナム＝ジュン・パイク	バイオリン独奏曲	
13	ジョー・ジョーンズ	機械仕掛けのオーケストラ	
14	塩見允枝子	ミラー・ピース	
15	塩見允枝子	ベン・パターソン70歳の誕生日のためのウォーター・ピース	
16	ヴォルフ・フォステル	TOT (Technological Oak Tree)	樹海
17	贅嘔	レインボー・ミュージック No.1	
18	贅嘔	アブラハム	
19	ベン・パターソン	乾杯	富士五合目
20	エリック・アナセン	半分のピース	
21	エメット・ウィリアムス	不確定な長さの歌	
22	ジェフリー・ヘンドリックス	ベン・パターソン70歳の誕生日のための逆立ち	
23	オノ・ヨーコ	ヘッド・ピース	
24	ジョージ・マチューナス	アドリアーノ・オリベッティを悼んで	
25	ジャクソン・マクロウ	サウンド・ポエム	車内
26	刀根康尚	拍手喝采	

2回目の「バス観光ハブニング」が開催された翌年、フルクサスのオリジナル・メンバーで贅嘔とも特に親しいベン・パターソンが70歳の誕生日を記念して、自宅のあるドイツからシベリア鉄道経由で日本にやってくることになった¹²。このグランド・ツアーはルネ・ブロックをはじめとするヨーロッパの支援者からの寄付で実施されたが、不足分は途中下車をした場所でフルクサスのイベントや自身のパフォーマンスを行い、資金を集めながら旅行を続けるという計画であった。ドイツ出発前にベンから支援の相談を受けた贅嘔は、ギャラリー360°を通じて、日本にやってくる旧友を迎えに行くという「バスツアー」を企画。結果として、誕生日である5月29日に登山したベンを「バス観光ハブニング」のかたちで富士山まで迎えに行くこととなった。したがって、この3回目のイベントは、贅嘔主宰による第2回「バス観光ハブニング」ということになり、「バス観光ハブニング Vol.2」と名付けられた(図9)。

この時のバスツアーはギャラリー360°のある表参道から富士山まで行って帰ってくるという長距離の行程だったため、開催時間は11時間にもわたり、上演された作品も第1回の倍以上の数となった。プログラムは贅嘔とアリソン・ノウルズによってニューヨークでリスト・アップされたが、その方法はアルファベット順にアーティストを選出し、各作家の代表的な作品を選ぶというものだった。

ここまで、過去3回の「バス観光ハブニング」についての情報を整理してきた。最後に、2012年に新潟で行われた4回目の「バス観光ハブニング」について、次章で詳しくみていきたい。

3. 「バス観光ハブニング in 新潟 2012」について

冒頭でも述べたように、本イベントは新潟市美術館で開催された「贅嘔 ふたたび虹のかなたに」展の関連イベントとして、2012年7月28日の展覧会オープン後に急遽開催が決定し、同年9月22日に実施された。詳細は下記のとおりである。

「バス観光ハブニング in 新潟 2012」

日時：2012年9月22日(土) 10:00～17:00

場所：新潟市美術館、正福寺(新潟市)、笹川流れ(村上市)、乙宝寺(胎内市)

主催：新潟市美術館／協力：ギャラリー360°

出演：贅嘔、磯山悦雄、ヴァリダ、斉藤俊之、菅谷幸、助田憲亮、高須修、村井啓哲、ヤリタミサコ、蓬田守、冷泉淳

プログラム：

上演 No.	作家 No.	作者名	作品名	場所
1	25	ロバート・ワッツ	2 インチ	新潟市美術館
2	4	フィリップ・コーナー	お寺の鐘	正福寺
3	10	アリソン・ノウルズ	シャッフル(すり足)	
4	2	ヨーゼフ・ボイス	チーフ ユーゼフ・ボイスの為に	車内
5	13	ジャクソン・マクロウ	サウンド・ボエム "Words nd Ends from Ez", "Like a map, the arcana of the universe lay bare before me."	
6	9	ミラン・クニジャーク	ファッション	
7	21	ダニエル・スポエリ	ランチ・ピース "Meal Variation for Today"	笹川流れ(塩工房)
8	1	エリック・アナセン	半分のピース	
9	10	アリソン・ノウルズ	豆音	笹川流れ(宝屋浜)
10	5	ウィレム・デ・リダー	ウォークマン・ピース	
11	27	贅嘔	シャーロット・モアマンとエミリー・ハーヴェイに捧げるハンギング・ピース	

12 シベリア鉄道経由で来日するという計画は、生前のマチューナスが計画し、果たせなかったプロジェクトであった。



図9 「バス観光ハブニング Vol.2」フライヤー



図10 アリソン・ノウルズ《シャッフル》
(「バス観光ハブニング in 新潟 2012」より)



図11 ダニエル・スポエリ《ランチ・ピース》
(「バス観光ハブニング in 新潟 2012」より)
左：食前のランチ・ボックス 右：食後



図12 ウィレム・デ・リダー《ウォークマン・ピース》
(「バス観光ハブニング in 新潟 2012」より)



図13 贅囃(シャーロット・モアマンとエミリー・ハーヴェイに捧げるハンギング・ピース)
(「バス観光ハブニング in 新潟 2012」より)



図14 アーサー・クブケ《仕事歌》
(「バス観光ハブニング in 新潟 2012」より)



図15 オノ・ヨーコ《フライ・ピース》
(「バス観光ハブニング in 新潟 2012」より)



図16 ベン・ヴォーティエ《ART=BEN》
(「バス観光ハブニング in 新潟 2012」より)

13 乙宝寺は新潟県屈指の古刹で、様々な伝説や逸話が残されている。中でも、釈迦の左目を納めたと伝えられる舍利塔や、平安時代に空海が立ち寄った際に仏具の独鈷杵(とっこ)で地面を突いて湧きでたと云われる「どっこん水」の伝説は有名である。フルクサスの創始者であるジョージ・マチューナスが暴漢に襲われて左目を失っていたことと重ね合わせて、この場所が選ばれた。

14 ただし、上演の順番は場所との兼ね合いで決められているため、アルファベット順ではない。

12	11	アーサー・クブケ	仕事歌	笹川流れ (宝屋浜)	
13	15	オノ・ヨーコ	フライ・ピース		
14	17	ナム=ジュン・パイク	ナム=ジュン・パイクの安息に捧げるテレビ・キャンドル		
15	23	ベン・ヴォーティエ	ART=BEN		
16	12	ラ・モンテ・ヤング	一本の直線を引き、それをたどる		
17	29	ラリー・ミラー	リモート		
18	28	ジェフリー・ヘンドリックス	逆立ち		
19	24	ヴォルフ・フォステル	デコラージュ		
20	6	ロベール・フィリウー	愚かな考えのための十分な食べ物		車内
21	3	ジョージ・ブレクト	ドリップ・ミュージック		乙宝寺
22	19	トマス・シュミット	水桶のための循環		
23	17	ナム=ジュン・パイク	ナム=ジュン・パイクの安息に捧げるテレビ・キャンドル		
24	7	ディック・ヒギンズ	ハロー、握手		
25	20	塩見 允枝子	エンドレス・ボックス		
26	14	ジョージ・マチューナス	アドリアーノ・オリベッティを悼んで		
27	26	エメット・ウィリアムス	不確定な長さの歌	新潟市美術館	
28	16	ベン・バターソン	ペーパー・ピース		
29	30	贅囃	贅囃の断髪式		
30	8	ジョー・ジョーンズ	贅囃アレンジによる“機械仕掛けのオーケストラ+聴衆による拍手喝采”		
	22	刀根 康尚			

※作家 No.18は斉藤陽子だったが、スケジュールの関係から上演されなかった。

(1) イベントの決定

実は、新潟での展覧会開幕前に、地元の食材を使った贅囃による「レインボー・ディナー」という別のイベントを構想していたが、様々な理由から実現には至らなかった。このことから、今回の企画ではギャラリー 360°に全面的に協力してもらい、どのような作品が実現可能か慎重に相談をした。その結果、贅囃の代表的なイベント作品である「バス観光ハブニング」が条件的に最もよいのではないかということになり、作家の合意も得て、演目と場所の選定へと進んだ。

(2) 場所の選定

新潟らしい場所という贅囃のリクエストで弥彦神社や寺泊などいくつかの候補地が挙がったが、本人の強い希望で国の名勝天然記念物に指定されている「笹川流れ」がメイン会場として選ばれた。こうして新潟市美術館を出発地として北上し、笹川流れのある山形との県境に近い山北地域までの約100キロの道中で、さらに数か所の立ち寄り地点を選んで全体の行程を構成することとなった。

その過程で候補地として挙がった「新発田城跡」は下見の結果、自衛隊が隣接しているなどロケーションに問題があったため除外され、代わりに胎内市に位置する「乙宝寺」が歴史的伝承やロケーションなどにおいて最良と判断され、第2会場に決定した¹³。また、プログラムにフィリップ・コーナーの《お寺の鐘》が予定されていたことから、鐘を撞かせる場所をあらかじめ用意しておく必要があり、要望を受け入れてくれた新潟市内の「正福寺」にも立ち寄ることとなった。

(3) 演目の決定

演目については、ギャラリー 360°の協力のもと、第3回と同様に贅囃自身が作家のアルファベット順に、できるだけ1作家1作品というルールで演目を決めていった¹⁴。このため、作家については前回とほぼ同じラインナップとなっているが、演目については変更されたものも少なくない。それは、用意された場所による制限も当然あるだろうが、「パフォーマンスは短ければ短いほどいい」という贅囃の考え方や、彼の好みが反映されていることも事実だろう。

(4) 各演目の内容と実施状況(※番号は上演 No.)

1. 美術館入口に参加者たちを集め、イベントの始まりを告げるとともに、パフォーマーが七色のリボンを一気にカット。これによってツアーがスタートした。
2. 正福寺前でバスを降り、境内の鐘楼まで進み、パフォーマーが鐘を1撞きするという作品。ところが、当日はお彼岸だったため、ちょうど午前10時より住職が鐘を鳴らし始めてしまい、パフォーマンスとの区別がつかない渾然とした鐘撞きとなった。
3. 正福寺からバスの駐車場まで西堀通りを約800メートル、参加者全員が前の人の肩につかまった状態ですり足で移動。お彼岸で混雑していた西堀通りで注目の的となった(図10)。
4. ポイスの赤いバラが、十字型に貼ったテープでバス正面ガラスの中央上部に固定された。
5. ジャクソン・マクローウの2編の詩をヤリタミサコが音の強弱やリズムをつけながら朗読するパフォーマンス。
6. 贅囀からミランについての思い出話と作品についての解説があり、参加者に麻紐が配布された。ツアー中にペンダントになる素材を見つけてオリジナル・アクセサリーを制作するよう指示。
7. 贅囀がスポエリの作品と思い出について語り、アーティストの食べ残しをそのまま作品にしたスポエリの有名な「畏絵」シリーズ同様に、参加者に配られた弁当を食した後、ビニールに入れて持ち帰って、各自の作品とするよう指示(図11)。
8. 半分に分割する作品で、持参したロールケーキを定規で測りながら等分に分割し続け、最後に参加者たちが食した。
9. アリソンの豆を使った贅囀のハンギング・ピースを、崖の上に立ったパフォーマーがまるで波音のように、ゆっくりと鳴らすパフォーマンス。
10. 4人のパフォーマーがMP3プレーヤーに録音された指示を聞きながら、椅子各1脚を使って各々動作をする。最後は全員同時に終了(図12)。
11. 贅囀にとって最も大切だというシャーロット・モアマンとエミリー・ハーヴェイにもらった下着を、宝屋浜の岩にハンギング・ピースとして展示(図13)。
12. パフォーマーたちが好き好きに歌いながら、宝屋浜の岩場を掃除(図14)。
13. 浜にある岩を各自が選び、その上から参加者全員で飛んだ(図15)。
14. ナム=ジュン・パイクの《キャンドルTV》を模して、ブラウン管にロウソクを灯したオブジェを贅囀が再現し、パイクへのオマージュとして海岸の洞窟入り口に設置。
15. 「Ben=Art」と書かれた紙札を下げたパフォーマーたちが横一列に並び、合図とともに各々の表情でフリーズし、再度の合図で解除(図16)。
16. 贅囀が手にした1本のロープによって描き出された線の上を、参加者全員でたどりながらついて行くパフォーマンス(図17)。
17. 贅囀がカンガルーの革を使って手作りしたという投石器で、浜辺に落ちていた小石を海へと飛ばし、移動させた。
18. 逆立ちをしたパフォーマーの足の指に、「FLUXUS」「PEACE」「LIFE」の札のついたヒモを渡し、しばしポージング(図18)。
19. 贅囀が福井での回顧展図録のために打ち込んだデータが入ったパソコンを段ボールに入れ、その場で溶いたコンクリートを流し込み、固めた。
20. 用意された質問が司会者から参加者全員に順番に投げかけられ、即興で答えていく。「冷蔵庫には何が入っているか」という日常的な質問から、「レーニンがいなかったら世界はどうなっていたか」という非日常的な質問まで多様な問いがあり、回答者のセンスや性格がうかがわれた。
21. 空海が突いて湧き出たといわれている乙宝寺の湧き水を参加者が各自ペットボトルに汲



図17 ラ・モンテ・ヤング《一本の直線を引き、それをたどる》(「バス観光ハブニング in 新潟 2012」より)



図18 ジェフリー・ヘンドリックス《逆立ち》(「バス観光ハブニング in 新潟 2012」より)



図19 ジョージ・ブレクト《ドリッピング・ミュージック》(「バス観光ハブニング in 新潟 2012」より)



図20 トマス・シュミット《水桶のための循環》(「バス観光ハブニング in 新潟 2012」より)



図21 ナム=ジュン・パイク《ナム=ジュン・パイクの安息に捧げるテレビ・キャンドル》(「バス観光ハブニング in 新潟 2012」より)

図22 塩見允枝子《エンドレス・ボックス》
 (「バス観光ハブニング in 新潟 2012」より)



図23 ジョージ・マチューナス《アドリアーノ・オリベティを悼んで》
 (「バス観光ハブニング in 新潟 2012」より)



図24 エメット・ウィリアムス《不確定な長さの歌》
 (「バス観光ハブニング in 新潟 2012」より)



図25 ベン・バターソン《ペーパー・ピース》
 (「バス観光ハブニング in 新潟 2012」より)



図26 鬚嘔《鬚嘔の断髪式》
 (「バス観光ハブニング in 新潟 2012」より)

み、合図とともにそばの池に一齐に注いで、水滴で音楽を奏でた(図19)。

22. パフォーマーが自らの周囲に円形に並べた12個のガラスの瓶のひとつに湧き水を満たし、膝まづいた姿勢のまま隣の瓶に水を移し替えていく。瓶の水がすべて無くなるまで繰り返すという苦行のようなパフォーマンスで、時間がかかるため、その間に参加者たちは他のパフォーマンスを続けた(図20)。

23. 14番目に出てきた鬚嘔の《テレビ・キャンドル》を、乙宝寺境内に安置されている仏像の横に設置。バイクの《TV 仏陀》を彷彿とさせる見事な追悼作品となった(図21)。

24. 参加者は本堂の周囲を左右二手に分かれて歩き、出会った人全員と握手を交わしながらハローと挨拶し、回り続ける。子供たちは喜び、小走りに人々を追い越しながら回り続けた。

25. 塩見允枝子の《エンドレス・ボックス》を本堂の階段に展開(図22)。

26. 一列に並んだパフォーマーが円周率の印刷された紙を片手に持ち、各自で決めた数字の場所でメトロノームに合わせて黒の山高帽を上げ下げするという、フルクサスの代表的な作品。乙宝寺の六角堂には釈迦の左目が納められているという伝説があるため、左目を失ったマチューナスへの追悼の意を込めて、彼の代表作をこの場所で行った(図23)。

27. スキンヘッドのパフォーマーの頭上にまずはリンゴを載せ、落ちないことを確認した後、赤ワインを注いだグラスを載せて、そのまま立ち上がらせた。作者のエメットはさらにその状態で20メートル歩いて戻ってきたそうだが、今回はその場で座って終了(図24)。

28. 美術館に戻った参加者たちを茶色のロール紙でぐるぐる巻きにし、内外から紙をたたいたり破いたりして盛んに音を立てる。最後には再び紙を集めてひとまとめにして終了(図25)。

29. オノ・ヨーコの《カット・ピース》をもとに、鬚嘔がこのイベントのために作った新作。鬚嘔の頭髮に参加者全員がハサミを入れ、断髪。切った毛髪は参加者が記念に持ち帰った(図26)。

30. ジョー・ジョーンズの《機械仕掛けのオーケストラ》と刀根康尚の《聴衆による拍手喝采》を鬚嘔がアレンジした作品。ねじ巻き式のおもちゃの猿(と鬚嘔)がタンバリンを叩くのにあわせて、次第に加速しながら、参加者も一緒に拍手をしてイベントが終了(図27)。

(5) 出演者および参加者について

出演者には、ギャラリー360°の菅谷幸と村井啓哲を中心に、ヴァリンダやヤリタミサコなどこれまでにも度々フルクサス・イベントに出演してきた関係者が集められ、そこに助田憲亮や斉藤俊之といった鬚嘔の福井の仲間たちが加わった。一方、イベントの参加者は一般に広く募集をかけたため、親と一緒に参加した5歳の子どもから80歳代のご婦人まで、幅広い年齢層が集まった。新潟県内からの参加者が多かったが、中には神奈川県や福井県、広島県から来た鬚嘔ファンや関係者も含まれていた。イベントの開催決定が展覧会の開幕後で、募集期間も1カ月程度と短かったため、当初の予想よりも少ない応募数ではあったが、鬚嘔の知名度と根強いファンの多さを実感した。

おわりに：本イベントの位置づけ

今回の「バス観光ハブニング in 新潟 2012」は、鬚嘔自身が主宰して開催されたものとしては3回目にあたるため、「バス観光ハブニング Vol.3」といえるだろう。また、過去3回の同イベントがすべて太平洋側で開催されていることから、日本海側では初めての、記念すべきイベントであった。

演目は回を重ねるごとに変更され、各々の場所と時世にあった作品が選ばれていることがわかった。例えば、今回の新潟公演は海岸と寺院を舞台としていたことから、1966年の第1回のロケーションにより近いと言えるが、1966年に行われた《テレビ・デコラージュ》

のように海にテレビそのものを投げ捨てるというパフォーマンスは今日では再現不可能であったため、今回の《デコラージュ》では、饜嘔がパソコンをコンクリート詰めにして持ち帰った。このように、半世紀の時を経て、作品が時代とともに変化している様子が印象に残った。

一方、内容は少しずつ変化しながらも、饜嘔が1966年当初に望んだように、「バス観光ハプニング」がフルクサス・メンバーのイベント作品を広く紹介する貴重な機会となっている点に変わりはない。饜嘔が本公演の欧文タイトルに「To My Lovely Fluxus Friends by AY-O」と付していたことからわかるように、この作品には彼のフルクサスに対する深く変わらぬ愛情が込められている。

この新潟公演の後、広島市現代美術館での展覧会に際して、饜嘔は再びイベント「虹の晩餐会」を行った。今回の新潟と広島の2つのイベントの最後には「饜嘔の断髪式」という演目が組み込まれているが、この作品は饜嘔が「イベントを卒業する」という意味が込められていた。彼は今後、他のフルクサス・メンバーからの依頼で出演する以外、自身が率先してのイベントは行わないという。饜嘔の日本で最初のフルクサス・イベントのひとつであった「バス観光ハプニング」が、彼の最後のイベント・シリーズになってしまうのか。その約半世紀の活動を振り返る時が来ているのかも知れない。

文末になりましたが、本稿を執筆するにあたって貴重な資料や情報をご提供いただきましたギャラリー 360°の菅谷幸氏、村井啓哲氏、西山輝夫氏に厚く御礼申し上げます。

(新潟市美術館 学芸係長)



図27 ジョー・ジョーンズ+刀根康尚《饜嘔アレンジによる“機械仕掛けのオーケストラ+聴衆による拍手喝采”》(「バス観光ハプニング in 新潟 2012」より)

「饜嘔 ふたたび虹のかなたに」展 関連企画

360° フルクサス・ジャパン

To My Lovely Fluxus Friends by AY-O

「バス観光ハプニング in 新潟 2012」

新潟市美術館で現在開催している「饜嘔 ふたたび虹のかなたに」展の関連企画として、パフォーマンス・イベントを行います。

1960年代にニューヨークで発祥したグループ「フルクサス」のメンバーとして、世界各地でパフォーマンスを行ってきた饜嘔氏。日本で最初のパフォーマンスとなった彼の「バス観光ハプニング」(1966年)の新たな展開として、「バス観光ハプニング in 新潟 2012」を行います。観光バスで新潟市内および近郊の名所を巡りながら、フルクサス・アーティスト達のパフォーマンス作品を饜嘔氏と参加者が一緒に行います。

日 時： 9月22日(土) 9:30 美術館前集合
(10:00 出発、17:00 解散)

参加費： 3,800円 (昼食代+バス代+「饜嘔展」観覧券+レジャー保険加入代)

定 員： 40名

申込締切： 9月19日(水) ※応募多数の場合は抽選

申込方法： 電話・FAX・メールにて、住所・氏名・年齢・電話番号(当日連絡が取れる連絡先)・FAX番号を明記の上、美術館までお申し込みください。

その他： 当日、美術館まで自家用車でお越しの場合は、お申込み時にお知らせください。

協 力： ギャラリー 360°

お問い合わせ：新潟市美術館
〒951-8556 新潟市中央区西大畑町 5191-9
TEL: 025-223-1622 FAX: 025-228-3051 E-mail: museum@city.niigata.lg.jp

新潟市美術館
Niigata City Art Museum

参考
「バス観光ハプニング in 新潟 2012」フライヤー

新潟市美術館・新潟市新津美術館研究紀要 第1号 (平成24年度)
Bulletin of Niigata City Art Museum & Niitsu Art Museum No.1

発行日 / 2013年3月25日

編集・発行 / 新潟市美術館

〒951-8556 新潟市中央区西大畑町5191-9

TEL.025-223-1622 FAX.025-228-3051

印刷 / 株式会社 北都

©2013 新潟市美術館・新潟市新津美術館

ISSN 2187-6770